

■ 書 評



野の医者とは何か？ 一心の治療とは何か？

東畑開人 著
誠信書房
2015年8月 302頁
本体価格 1,900円＋税

タロット、占い、ヒーリング、アロマ、マッサージ、スピリチュアル、ユタ（シャーマン）、そして数多の現代救済宗教。私たちの日常は一見怪しげな治療者達に取り囲まれている。本書では、怪しくて「トンデモ」でそれでいて自由に生きる野生の治療者たちを「野の医者」と名指す。自称正統派の臨床心理士にして野生の思考に魅せられた医療人類学者が、「野の医者」達の謎を解き明かすという高邁な使命を背負い、沖縄中を駆け巡る。笑って泣いて、心の治療とは何かを再考する冒険譚である。

高学歴ワーキングプアの代表格にしてご多分に漏れず失職し、悩み傷ついた著者は、生来のあふれる好奇心に癒されたい欲求もあいて、「ありとあらゆる怪しいところに行ってみよう」とマジカル・ヒーリングを受けてまわる。「3分に1個心のブロック解除」するマインドブロックバスターをマスターし、手から金粉を出して前世とオーラを見られるようになる旅の中で、癒す知の構造を明らかにしていく。

「野の医者」とは、病み、そして癒された人々たちである。ほとんどの人が深刻に病んだ時期があり、それをくぐり抜けた後に治療者としての活動を始めている。病んでいるからこそ癒せる。時に荒唐無稽であるにもかかわらず人を癒す「野の医者」の治療の核心は、病んだ人を「癒やす病む人」にしていくプロセスにある。貧困・孤独・数多の不幸の果てに、「野の医者」は、人を癒すというひとつの生き方を与えるのだ。

「もしかしたら私たち臨床心理士も野の医者的一种なのではないか？」「どうして自分はこころの治療について問い直しているのだろうか？」自らが癒された知を自由にプリコラージュして逞しく生きていく「野の医者」達との出会いを通じて、臨床心理士は自らの寄って立つ地面を揺るがしながら、心の治療を相対化していく。

「そもそも何が治癒なのか治療法によって違うのだ。癒しはひとつではない。治癒とはある生き方のことなのだ。心の治療は生き方を与える。そしてその生き方はひと

つではない。心の治療とは、クライアントをそれぞれの治療法の価値観へと巻き込んでいく営みなのだ。」

どうやらここで、精神医学についても再考しなければならないようだ。「わたしたち精神科医も野の医者的一种なのではないか？」「野の医者ではないとして、野の医者とは何か違うのか？」と、ありふれた精神科医の日々の診療は、まぎれもないプリコラージュである。深刻に病んだ時期がある人もまた少なくない。医学の後ろ盾にある「エビデンス」は、メカニズムを問わない。まさに「野」である。

価値と癒しの多様化する時代において、社会保障の名の下に、診断書を書くという特権を医師は独占している。福祉（生活の支援）を受けるには『医者之魂を売る』必要があると語る当事者もいる。この点において、精神科医は「野」ではない。

過度な権力集中の揺り戻しから、当事者から生まれたはずの概念「リカバリー」を支援するとうたう医師も増えてきた。今度はいつの間にか医師の提供する価値の全てがリカバリーと化し、治療観の陳腐化、生きるイメージの貧困化が止まらない。操作的診断と薬、診断書とリカバリー、巧妙な合わせ技によって医師の特権は維持されていく。「野」ではない特権を持ちながらパーソナルな生き方でも規定しようと拡大する精神医学の欺瞞に対しても、本書は問い直しを与えてくれる。

求められるのは、そうして自らを徹底して相対化する中で、それでも持ちこたえる力である。本扉にミハイル・パフチン「カーニバルの笑い」を記し、全てをあばいて世界を根底から揺るがす笑いに変えていく『アカデコミカル』の手法をとりながら、心の治療を真剣に再考する著者の物語を、つぶさに読み進める。

たまたま人を癒したい「野の医者」達は、傷付いた治療者にして人類学者であるモダンとポストモダンのマージナルマンを、海よりも深い慈悲の心で受け入れて愛する。ところが、頭はキレ、こころは閉ざした傷付いた臨床心理士を癒すのは簡単ではない。結局、かろうじて届いたのは、プリコラージュされた臨床心理学であった。そして何よりも、「書く」という行為こそが癒す力を持つことが、一冊の中の筆致の変化から見て取れる。著者にとっての癒しは知にあったのだ。

傷付き自らを相対化する旅の果てに、マージナルマンは臨床心理学へとかえっていく。こんなに賢くて孤独に危うくて創造的な治療者の人生を引き受けねばならないとすれば、精神分析というのはいやはや大変な営みであろう。自称正統派の臨床心理士にして野生の思考を持ち続ける医療人類学者が、癒す知の系譜に連なり紡ぎ出していく物語の続きが楽しみで仕方がない。

(熊倉陽介)